

授業の基盤は「まなざし」

1 私が授業をする必要性

ある学校で、国語の授業をすることになった。

校長室で教室に行くまでの時間を費やしているときだった。ふっと私は、その学校の校長先生に次のように話しかけた。

「私の授業は、特別なことは何もしません。ごく平凡なものです。だから、もしかすると、見ていただく先生方は、拍子抜けされるかもしれませんね。」

校長先生はどう応えてよいか分からず、言葉を濁された。まだ授業をする前で、私がどのような授業をするか分からないのだから、それは当然のことだった。けれども、それは私にとって、謙遜でも何でもなかった。シンプルな授業になる、それは私にとって当然のことだったからだ。では、なぜそんなつぶやきのようなことを口にしたのだろうか。それは、この学校においてそういうことはないとは思っていたけれど、もしかして、参観される先生方が私の授業から、特別なやり方とか授業者としての技術的な何かを探そうとされるかもしれないと危惧したからだろう。失礼なことだった。

私が日々授業をする教諭という立場から離れたのは37年も前のことである。しかし、それから15年経った今から22年前から、外部助言者として毎日のように各地の学校で授業を参観するようになった。つまり私は、授業という場、それは子どもの学びの場だが、そこに戻ってきたことになる。

とは言っても、それは私が授業をする場ではない。けれども、私は、「私のことをスーパーバイザーなどと呼ばないでほしい」と言って、「私は、皆さんの伴走者、同伴者です」と公言してきた。それは授業をする教師たちとともに授業づくりについて、子どもの学びについてともに考えるということでありたかったからである。

それなら、場合によっては、外部助言者である私が授業をするということがあっても不思議ではないということになる。けれども私は、私が授業をする強い必要性を感じない限り、それを行うことはなかった。

しかし、その強い必要性を感じて子どもの前に立つという出来事が生まれた。それが、一昨年、画家のひぐちけえさんとコラボして行った「詩の読みとアートをつなぐ」授業である（『詩とアートが“ほんとうのたべもの”になるとき』世織書房）。

その出来事の後、自分が授業をするということに対する考え方に変化が生まれた。一昨年、授業をしたとき私は 80 歳になっていた。それ以来、私自身の年齢と、今の教育界の状況、さらに垣間見える今後の教育のありようと突き合わせ危機感を強めるようになった。すると、自分が授業をする意味があるのではないかという思いが湧きおこった。その意味とは私の感じている教育の危機感に対抗するためだが、その危うさが存在するこれからの時代を担う教師たちに「大切なものをつなげる」という意味でもあった。それを今やらなければ悔いることになる、そう思ったからである。

とは言っても、やはり、強い必要感が生まれることが必須条件である。それが生まれたら、私は躊躇しない。そんな必要感がいくつも生まれたら、生まれれば生まれるほど、教育に可能性があるということになるからだ。

2 「方法」「技術」と「人間性」

その日は4月下旬。年度が始まって3週間ほどのこの時期に、どうしてその学校で私が授業をするようになったかだが、簡単に言うと、「学びの深まり」と「すべての子どもの学び」という「卓越性」と「平等性」の同時実現を目指す協同的学びにおいて、年度始めのこの時期、何を大切に、どういうことに取り組んでいけばよいのか、それを探る一助にしてもらいたかったからである。

校長先生からの連絡によると、これから後の適切な日に、全職員で私の授業の映像を視聴して考える研修会を行うということである。私の授業をただ参観しただけではなく、映像でもう一度見直してそこから何かを探り出そうとしていただけるのは、授業をした私としてはありがたいことである。

そのとき、皆さんが何に気づき、どういう協議をされるか、それは私には分からない。

ただ、そのときのために、原則として、以下のことは申し上げておきたい。

それは、私がどういう方法で授業をしたか、教育技術としてどこがどうだったか、そういった表面的なものに焦点を当ててほしくないということである。私は、「私の授業は平凡なものです」と校長先生に言ったと前述した。それは、目新しい方法をとることはないし、優れた教育技術を発揮することもないということだ。だから、私の授業から特別な方法や指導技術を見つけようとしても見つけられないし、たとえ見つかったとしてもそのことにたいした意味はないからである。

もし、先生方が、以下のような 11 項目に気づいてくれたら、そこから、「子どもの学び」とは何かということについて、そのとき教師に何が必要なのかということについて見えてくるのではないか、そう思う。

- ① 授業は、その開始時において教師の発する一言によってかなり左右される。たかが一言、されど一言である。子どもたちを見つめて、ゆっくりおもむろに発した私の言葉は？
- ② 子どもがめいめいで音読している際、そうっと子どもところに歩を進めて、一人の子どもの肩に手を置いたのは？
- ③ グループで「頭の中に思い浮かべたこと」を聴き合っているとき、私が黙って子どもを見つめていたのは？
- ④ その際、さきほどそっと肩に手を置いた子どものいるグループに近づき、その時だけ、その

グループに言葉をかけたのは？

- ⑤ 座っている席の順に、一人ひとり全員に話してもらおうとしたのは？
- ⑥ 子どもが話している間も、話し終わった後も、私がほとんど何も話さなかったのは？
- ⑦ 子どもの話したことの中に、学びの深まりにつながるものがあってもかかわらず、どの子どもの話も同じように聴き続け、何もしなかったのは？
- ⑧ 7グループ、27人の子どもの話を一挙に聴くようにせず、2グループの話でいったん止め、それを3回行ったのは？
- ⑨ 子どもの話をいったん止めた3カ所のいずれにおいても、そこで課題を出してグループをしていること、そして、順に語る順番に戻して子どもの考えを聴いているのは？
- ⑩ 全体を通じて、私のしていることに方法的に特別なものはなく、しかも自分が話すことよりも子どもの考えを聴き続けていたが、そのように授業をする私が頭に中に去来させていたこととは？
- ⑪ この授業のこのことが、秋になったときこうなっているという布石なのではないかと感じられたことは？

私は、授業は、方法や教育技術を磨けば質の高いものになると直線的、短絡的に考えないほうがよいと思っている。もちろん、方法や教育技術をすべて否定するつもりはない。けれど、方法や教育技術をどれだけ研究しても、肝心かなめのもものがなかったら、子どもの学びはよいものにはならない。それはほとんどの教師が実感していることである。優れていると感じる授業を見てそれをそのまま実施しても、似ても似つかぬ結果を招いたということを経験しているからである。

では、その肝心かなめのものとは何だろうか。それは、『まなざし』である。一人ひとりの子どもへの「愛」にもとづく『まなざし』、子どもが生み出す学びに注ぐ『まなざし』、それら子どもや学びの「今」を見つめる『まなざし』、「これから向かう先」に考えを及ぼせる『まなざし』、それらが決定的に大切である。そういう子どもに対する『まなざし』がなければ、どれだけ学習材に対する見識を有していても、多くの方法を知り尽くしていても、それは形だけのものであり、子どもは心を動かさない。

子どもの心ということで、注目してほしいものがある。それは、この授業の直後に子どもたちが記した「ふりかえり」である。その学校で予定されている映像を視聴して行われる研修会のために、授業の逐語録とともに、子どもたち全員の「ふりかえり」をお送りした。

そこには、子どもがどういうふうに関心を動かしたか、どこに心惹かれたか、私のことをどう見ていたか、そういう「子どもの心」が滲んでいる。しかし、それはどの子どもだれが読んでも分かるように書いているわけではない。ささやかな文章、ちょっとした言葉に立ち止まり心を働かせなければ、そういう子どもの心は浮かび上がってこない。

その「ふりかえり」を、授業において子どもが語っていること(逐語録)、さらに、それを語っている子どもの姿(映像)と照らし合わせると、さらにその子どものことが見えてくる。「ふりかえり」を読んで、子どもやその子の考えと出会い直す、それは授業者として不可欠なことである。やはり、ここでも、教師の『まなざし』がものを言う。

だから、私の授業を見ていただく先生方には、石井がどういう『まなざし』を向けているかを見てほしい、感じ取ってほしいと切に思う。そのために、私が『まなざし』を注いでいる子ども一人ひとりをよく見てほしいと思う。すべては子どもの姿に現れるからだ。

もちろん、私の『まなざし』が理想的だということを言っているのではない。それでも、私は私なりに、一つひとつの私の行為に、かける言葉に、なんらかの目的とか意味を持って行っている。その一つひとつが、あるときは、今のその子どもに対して必要不可欠なものとして行ったものであったり、また別のときには、先々、こうなったらよいという願いの下に行ったものであったりしている。

もし、そういう私の行ったことが、子どもの学びを育み、子どもの意欲を引き出し、学びに対する期待感を高めるものであったら、それを引き出したものは何なのだろうか、石井のどこに、子どもをそうさせるものがあつたのだろうか、またはここでそれが足りないのではないか、そういう「人間」としての私をまな板に載せてほしい。

授業という行為は、生身の人間である教師が、これも今生きている生身の子どもと行う即興的、創造的な行いである。だから、方法とか技法、やり方よりも前に、人間的なものに心を働かせて観なければならぬ。方法は、そういう人間のあり方と関係づけて見ないと、生きたものにはならない、こういう見方ができるかどうか、それが、これからの教育を決定づける。

3 見境のないデジタル化が学びを壊す

今の社会が進めている改革は「Society5.0」という呼び名で言われている。それは、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させ、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」であると述べられている改革である。

ところが、今、行われているのは、本当に、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）の融合を目ざすもの」になっているだろうか。「人間中心の社会」になっているだろうか。そうではなく、「現実空間」から遠ざかった「サイバー空間（仮想空間）」に大きく舵を切るものになりつつあるのではないだろうか。

私は最近感じるのは「便利さが過度になると大切なものを壊す」ということである。そこに節度があればよいのだが、人間の欲望は、いつの世も、楽なこと・便利なものに走る。それが来るころまで来たと感じる。具体的に述べなくても、これを読んでくださる皆さんには、あれもそうだ、これもそうだと思ひ浮かぶことと思う。完全に危険領域に入ってきているのだ。

未来を担う子どもたちが学ぶ学校教育においては、そうであってはならない。せめて、学校教育においては、そうならないよう防がなければならない。そうしないと、子どもがとんでもない犠牲者になってしまう。

その危機は、なんでもないちょっとした「便利さ」が契機になる。

パスカルに「人間は考える葦である」という名言がある。葦という植物の中でも特別にか弱く細い存在を人間にたとえ、自然の中の人間という一個の存在のはかなさと、思索する偉大さを述べたこの

言葉のように、人間から「考える」ということを奪ったらそれは人間ではなくなる。

だから、学校の授業において、たとえば、一つの物語を読んで何を感じるかをAIから引き出すなどということが横行しているとすれば、自分の身近に起こったことを文章にすることを怠り、与えられた課題をAIで作文にするということが広まっているとすれば、それは「読むこと」も「書くこと」も「考えること」もすべて放棄することになる。

なぜ、こんな当たり前のことが分からないのか、このことの危険性を察知できないのか、それは、そういうことをしてしまう教師こそが「考える輩」ではなくなりつつあるからである。教師が、自分の足で立ち、自分で考えて授業を行うという文化が学校教育から失われつつあるからである。教科書と指導書通りに行う教師に成り下がっているからである。

教師も子どもも、考えることをしなくなる、考えなくても済む社会になろうとしている、それは、とっても便利で楽なこと、こうして人は、人としての存在価値も、生きることの意味も、つまり、豊かなものをどんどん失っていくことになる。

デジタル化による「サイバー空間（仮想空間）化」は、ますます加速化している。それを進化である、社会の豊かさであるかのように感じてしまい、そんな便利さを無節操に享受してしまったら、いつの間にか、人間のあり方から見ると、「痩せていく」ことになる。

見識のない「デジタル化」は、学びを壊し、社会を痩せたものにし、未来を危ういものにする。それは、いろいろなものを「中身のない箱だけのもの」にするからである。人の生き方を、「自分の考えで立てず、与えられたもので過ごす」ものにしてしまう危険性があるからである。

学校人として、子どもたちを、そういう「中身のない箱だけ」で満足するような人間にしたいくない。その考えに総論として反対する教師はほとんどいないだろう。しかし、具体的な一つひとつとなると総論とつなげてそうすべきかしないほうがよいかの判断をすることなく、なんとなく日々行っているのではないだろうか。もしその中に、総論としてよくないことがあれば、そのよくないことがいつの間にか子どもの中に根づいていくことになる。

ここで、具体的な一つひとつをとり上げて論ずることはできないけれど、世間の誰もがしていること、そうすることが常識化していることによって、本質的にはどうなのかと考えることなく、流されるままに行っていることが多々あるように思う。

私たち教師は、もっと「考える輩」にならなければいけない。「ちょっと待てよ。これ、ほんとにいいのかな？」と疑問を抱く、そうでなければならない。それは、「学び合う学び」において、「分からなさや間違いは宝物」と呼んで、こよなく大切にしていることと同じなのだから。

今、急速に広がっている「タブレットの活用」について、こういうことがたくさん見受けられる。そうではなく、「便利なものには子どもの学びを衰退させる危険性がある」と考えて立ちどまるようになれば、タブレットを使うことになったとしても、子どもの学びを衰退させないように使うことになるだろう。もちろん、よく考えてみて、これは、バーチャルな学び方になるタブレット活用ではなく、実際の物を目の前にして、手で動かすなど五感を使った学びにしなければいけないと思ったら、タブレット活用をやめることになるに違いない。要するに、「学び」に対するまっとうな『まなざし』があれば、その判断はそれほど難しいことではない。ちょっと立ち止まって考える、今の私たちに必要なのはそれを習慣化することなのだ。

新聞紙上(読売新聞)で読んだことだが、フィンランドでは、デジタル教科書から紙媒体の教科書に回帰させる傾向になっているという。大学の言語脳科学の教授は、

「子どもたちの脳の成長を促すためには、紙を使用した質の高い教育が欠かせない」と述べ、「検索機能や動画の視聴など、さまざまな機能があるほど便利にはなるが、その一方で思考力や創造力は奪われ、人間は脳を使わなくなってしまう」

という警鐘をならしておられる。

デジタル機器は万能ではない。むしろ、それを多用することで失われる、あるいは衰退させられる機能があるということである。

そもそも「Society5.0」は、2016年に政府によって決定されたもので、そこには、「高度に融合させる」「人間中心の社会」と述べられていたのだ。だから、デジタル化は、見境なしに推進すればよいとは考えられていないのだ。目指すのは「人間中心の社会」だということを、私たちは、改めて噛みしめる必要がある。

ちなみに、第1節に掲げた私の授業は、デジタル機器は全く使わないものだったし、黒板も、テキストにした作品は掲示してもらっていたが、そこに文字を書き入れることは全くなかった。そこに存在していた行為は、詩を音読する、グループで聴き合う、みんなに自分の読み描いたことを聴いてもらう、友だちの読み描いたことを聴いて自分の読みとつなげる、その繰り返しだけである。にもかかわらず、子どもたちは、後半になるほど集中していったし、多くの子どもが「ふりかえり」に「たのしかった」「うれしかった」と書いていたのだった。それは、子どもたちにとって、純粹に詩を読み、詩と出会い、詩を味わう喜びだったからである。

私たち教師の目的は、子どもを学ぶことに夢中にさせることである。

夢中になることで学びを深め、学ぶ楽しさを味わえるようにすることである。

そのため、どういう題材を選んで、どのように授業するかを考えるのが私たち教師であり、その際に使うツールの一つに、ここであえて繰り返すが、あくまでもそのための選択肢の一つにタブレットがあるということだと考えたい。

本稿の最後にどうしても強調しておきたいことがある。それは、第1節で述べたことだが、もっとも大切なことは、授業の方法や教育技術よりも前に、私たち教師が一人の人間として、子どもの成長に向き合っているという自覚なのだということである。

その自覚があれば、子どもに注ぐ『まなざし』は、子どもに対する慈愛の満ちたものとなり、子どもの学びに向ける『まなざし』は、学ぶことに対する尊重の心が存在したものになるにちがいない。

今、そしてこれから、学校教育に携わる私たち教師がもっとも心しなければならぬのは、「人間性」が存在する「まなざし」を磨くこと、それ以外にはない。